
日本国民参加型ゲーム

two

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本国民参加型ゲーム

【Nコード】

N0983Z

【作者名】

t w o

【あらすじ】

平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！

ゲームクリアの条件は・・・

何人生き残れるのか？

それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

4月1日 カズヤ宅

10:00

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。
今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは昼過ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

ユイとのデートの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合っちゃいないが…今後付き合えればいいな…と。

おれはカズヤ。

大学3年生になったばかりの20歳。
趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。

サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっちょこちょいで守ってやりたくなるような可愛い子だ。

… 12時に渋谷かあ、がんばるぞ！

4月1日 渋谷八千公前

12:03

やばい、まさかの遅刻…ぎりぎり間に合うと思ったが微妙に間に合わない…

せっかく早く起きたのに何やってんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思ってコンビニに立ち寄ったのがいけなかった…

まだ読んでない週刊誌が目につき、ついつい立ち読みし始めたら、電車に乗り遅れてしまった…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「ごめん、ごめん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたちやっただよ」

…しょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょうぶですよ。今日映画ですよ？私、久しぶりの映画です

「ごい楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔がおれの心拍数を押し上げる。

…がんばるぞー！

4月1日 渋谷某スポーツバー

19:10

映画を見て、しばらくぐらぐらした後、おれはユイとスポーツバーへ向かった。

おれとユイの共通点は野球好きということ。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思い、ここを選んだ。

6

「あのシーンよかったよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですよ。まさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ」

今日見た映画は、ユイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。

ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

(さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ)

ガガッ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザー……

ザー……

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタ……

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

「日本国民参加型ゲーム？なんだこれ？」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか？とも思ったが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押ししており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかった。

「おいつ、ここにも同じの出てるぞ！」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に収まらず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも…やはり…

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ユイの携帯にも同じものが…

「キヤー！、何これ？なんなのこれ？気持ちわるい…」

見れば見るほど薄気味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになってるぞ！」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかった。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がった。

地上に出たおれを待っていたのは、

- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』

……

……

……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ……

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な霧
囲気に変えている。

ジー、ジジツ、ジジツ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『130,000,000/130,000,000』

…と…

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、
ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国
民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるように…、僕は…、すで
に…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下さい…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なって…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減
つて…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さ
んの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー
…、です…

ドグォゴォー
ンゴゴォーッ

「キヤー、キヤー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるとヌメヌメとするこの感触、何かの生々しい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実…

…逃げる…逃げる？

…どこに？…どこやって？

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでここにいるのか？…

何でここまで来たのか？…

誰とここに来たのか？…

…落ち着け、落ち着け…

ギュツと誰かがおれの手を握った。

「助けて!!」

おれは我に返った。

「ユイ！」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞ！とにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すな！」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「ユイ、目を開けるなよ！」

おれはユイを守る！その一心だけで、無我夢中で逃げた…

4月1日 渋谷隣接郊外

21:35

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のように見えた。

「ここまで来ればだいじょぶだろうからちょっと休もうか」

ユイは黙って頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もう爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オエッ」

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思うと吐き気がしてきた。

ユイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

あれほどの惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになってしまうのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『 1 2 9 / 2 6 1 / 5 5 0 / 1 3 0 / 0 0 0 / 0 0 0
∴ 1 2 9 / 2 6 1 / 5 4 9 ∴ 1 2 9 / 2 6 1 / 5 4 8 ∴ 1 2 9 / 2
6 1 / 5 4 7 ∴

これだけはいつものおれの携帯とは違った…

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…これだけのことがあったのだから、本当なのか？

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか？

すでに80万人…？

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねえ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人々がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになっているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、
“ 渋谷も ” という近所の人の言葉が気になった。

「すみません、今“渋谷も”と言っていました、他にも何かあったんですか？」

「そうよ、今いろんなところで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど……」

ブザー、ブザー

急に携帯が震えた。

「あつ、またテレビ砂嵐になったわよ。また『ウッド・ベル』出てくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻って行った。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ…

そこに徐々に大きく映し出された…

『129,081,115/130,000,000』

文字が浮き上がると、またあのヘリウムを吸ったようなふざけた声が聞こえてきた。

「皆さん…、いかが…、でしたで…、しょうか…。

最初に…、100万…、ポイント…、くらいはと…、思い…、ましたが…、予定より…、やや…、ショート…、しました…。

今現在…、918,885名の…、死亡が…、確認…、されました…。

「ご冥福を…、お祈り…、します…」

…チーン…

「初めての…、ゲーム…、という事で…、皆さん…、お疲れ…、かと…、思います…。

今日…、この後…、だけは…、何も…、しない…、ことを…、お約束…、しますので…、

今日は…、ゆっくりと…、お休み…、下さい…」

「ふざけんなよ！なんだよこれ！ゲームってなんだよ！こっちは死にそうになったんだよ！くそっ！」

「…ねえ、…カズヤ先輩、…家に…帰りたい…」

ユイがやっとの声でボソツとつぶやいた。

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰ろう。ちゃんと送っていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ？今日一緒にいようか？」

こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ？何かあったらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言つとおれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

4月1日 カズヤ宅

23:36

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

ここはいつもおれが普通に過ごしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめくれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思うけど、無事ならいったん連絡ちょうだいね 母』

おれは、

『大丈夫だよ』

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷ったが、今日は大変だったね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い4月1日が目を閉じることで終わる。

ただ、目を閉じることで明日になる。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だったらいいなと思いつつおれは目を閉じた。

4月2日 高知県 ヒデ宅

10:55

朝からテレビでは、昨日起きた国内9ヶ所同時多発テロの話題しかやっていない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといっていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

2001年のアメリカの同時多発テロの時は、外国ということもあり危機感は全然わかなかった。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだろうと思っていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていないせいか、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じが生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

…人間ってこんなもんだよな…
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『128、355、680 / 130、000、000』

昨夜よりも70万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなっていったということだ。

そして、今この瞬間にもどこかで誰かが亡くなっているということだ。

とにかく自分でなくてよかったと思いつつ、大学のサークルへと向かった。

4月4日 四国全土

4:44

いつせいに画面が消え、砂嵐になった。

カタカタ、カタツ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノツテイマス。

…デハ…」

カタツ、カタカタ、カタ

「 シコクヘン
」

カタ

四
国
編

4月4日 高知県 ヒデ宅

5:15

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰って来たのは3時過ぎだった。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん？なんだ？」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出してみた。

.....

「すみません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよ！携帯見てみるよ！いいから手、離せ！」

…携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行った。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

……

……

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかった。

理解するのに数秒かった…

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた…

おれはまず一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめていくのがわかった。

「ヒデ、これからどうするよ？」

「どっつするって言われても、3日前のこともあるから逃げないとやばいだよ！」

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶって話だから。アキオ、おまえ車出してくれ！」

「車か…わかった。すぐ準備してヒデんどこに迎え行くよ！」

「あと、アキオの車5人乗りだよな？ハセガワとイワキ、マツナミに連絡しとくから3人も頼む！」

「了解、みんな近くだから15分でみんな拾ってくよ！」

20分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まった。

ハセガワ、イワキ、マツナミももう車に乗っている。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出てきたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持った。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩いているお守りくらいだ。

「ヒデ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

「道だいが混んでるよ。“毒ガス予告”から30分くらいしか経ってないのにやっぱりみんな混乱してるよ」

「くそ！歩道通れよ！避けてくのもんどくせえな！」

「ってか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「しょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね……」

車の外を見ると、30分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

人混みを掻き分けてやっとのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっていている人の中に知った顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合ったが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬって、おれらの車によってきた。

ドンッ、ドンッ、ドンッ

「おい、おれも乗せろよ！ドア開けるよ！おまえらだけ車で逃げん

のはずりいぞー！早く開けるよー！おいっ！」

勢いでマツナミがドアを開けようとした。

「マツナミ開けるな！」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えっ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。

…あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついつつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよー！マツナミも知ってんだろ？」

「それはそうだけど…」

確かにアキオが言っているとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をして一度も聞いてもらったことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになった。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思ってなかったせいかな納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

「おいっ、待てよ！待てって！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもっとはやく！」

「速くっって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよ！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやってくる。

100メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンツという音とともにタカハシの姿が見えなくなった。

すると、急にフロントガラスの上の方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつ！やばいどうしょ！」

と言いながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のような形相で、車から振り落とされないようにしがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあっという間に視界から消えた…

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドッ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかっていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまっていた。

アキオはハンドルを両手でしっかりと握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まった身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けでヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラー越しに目が合ったような気がした。

と次の瞬間、後続の車はその人間を飲み込んでいった…

アキ才は黙ったまま前だけを向き運転を続けている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキ才がたまらず口を開いた。

「だって、もう定員いっぱいだから乗れないよな？」

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登ってきたり…実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキ才は自分のことを正当化するように早口でまくし立てる。

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

ここで自分を正当化しておかないと持たないと思った。

「そつだよ！乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗ろうとしてくるあいつが悪いんだよ！

あいつが諦めていればこんなことなかったんだろ？あいつのせいでだよ！」

そついつつも頭の中では、サイドミラーに映ったあのシーンが何度何度も繰り返し返されている。

「とにかく今は逃げないと…」

6:15

朝起きてから1時間。

もう昨日までとは違う。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいている。

この混乱した中で、そのことを正当化してしまう自分がある。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、3つのルートしかない。

1つ目は、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

2つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

3つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいますのでまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江JCTだ。

川之江JCTがこの3つのルートのどこを選ぶかの分岐点となる。

10:03

「ヒデ、どうする？もうじき川之江JCTだよ。どっちに行く？」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた目は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そつだな、正攻法で最短距離に行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…」

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいよいよ

渋滞の中、JCT直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わるのと同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門って一番遠いんじゃない？」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

というおれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かうことになった。

19:16

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れるニュースは『ウッド・ベル』のことだけで
もう耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざりしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画
面が赤く染まり、そこから血みどろになった文字が浮かび上がって
きた。

『四時間四十四分』

「4時間44分？4時間44分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者2556285名』

ここでもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひっかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0983z/>

日本国民参加型ゲーム

2011年12月14日21時54分発行